様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０３２０５

研究課題名（和文）印欧語における動詞語幹形成母音の起源に関する歴史言語学的研究

研究課題名（英文）A Historical Linguistics Study of the Origin of Thematic Vowels in Indo-European Verbs

研究代表者
吉田　和彦（Yoshida, Kazuhiko）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０１８３６９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,800,000円

研究成果の概要（和文）：同系統に属する諸言語の比較によって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを解明することは、比較言語学の最も重要な課題である。本研究では、アナトリア諸語に保存されている古い言語特徴に基づいて、印欧語動詞にみられる語幹形成母音の起源という未解決の問題に対して、新たな歴史的説明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　言語の歴史を復元することは、人類がたどってきた歴史を復元するのと同様に、人文学における最重要課題のひとつである。
　本研究においては、古代インド･ヨーロッパ諸語において生産的に使用されるようになった動詞語幹形成母音の起源および関連する諸問題について、歴史言語学的方法を用いて明らかにすることを試みた。特に注目したのは、近年の印欧語比較言語学において質量ともに重要性を増しているアナトリア諸語である。

研究成果の概要（英文）：The most important issue of the comparative linguistics is to clarify prehistories of the individual languages of the same language family by reconstructing their proto-languages by the comparative method. In this study an attempt has been made to provide a new historical explanation to the unsolved problem of the origin of thematic vowels in Indo-European verbs on the basis of archaic linguistic features retained in Anatolian languages.

研究分野：言語学

キーワード：印欧語比較言語学　アナトリア諸語　動詞語幹形成母音　歴史言語学

１．研究開始当初の背景

ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語に関する文献学的研究は、近年めざましい発展を遂げている。量の面については、発掘されたヒッタイト語粘土板の数はこの 30 年のうちにほぼ倍になり、総数は現在約３万枚にのぼっている。また、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語などの古代アナトリアで使われていた他の印欧諸語についても、近年新資料がつぎつぎに発掘され、それにともない、個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が着実に進展している。また質の面では、近年の文献学的研究の進展によって、粘土板に記録されたヒッタイト語が古期ヒッタイト語（紀元前 1570—1450 年)、中期ヒッタイト語（紀元前 1450—1380 年)、後期ヒッタイト語（紀元前 1380—1220 年）に時期区分されるようになった。これによって、体系的な歴史文法の構築が可能となった。その結果、以前は名のみであったアナトリア比較研究が、ようやく本格的な段階に到達したと言えるであろう。

２．研究の目的

同系統に属する諸言語を比較することによって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることは、比較言語学の最も重要な課題である。言語の歴史的研究の分野において、研究の進展に大きな影響を与える要因のひとつは従来知られていなかった新資料の追加であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。アナトリア語派の諸言語に関する文献学的研究のめざましい発展は、近年の印欧語比較研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。本研究の目的は、アナトリア諸語に保存されている古い言語特徴に基づいて、印欧語動詞にみられる語幹形成母音の起源という未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えることにある。

３．研究の方法

本研究のもっとも大きな特色は、今後の印欧語比較言語学の発展の鍵を担うアナトリア諸語を研究の中心に据える点にあった。この研究を 4 年間に効果的、かつ有機的に推進するために、「印欧諸言語の基礎分析作業」、「アナトリア象形文字資料およびアルファベット資料の検討」、「アナトリア楔形文字資料の検討」、「研究のレビュー」、「研究の実質的推進・総括」という 5 つのユニットからなる研究体制を組織した。はじめの 3 つのユニットは基本的に独立して研究を進めたが、研究代表者と緊密に連絡を取り合っう。また適宜、研究横断的な会合の機会を持った。総合的な立場から研究の推進を行なうのは研究代表者であったが、各国の研究者との国際的な連携のもとで、レビューや助言を受ける機会を積極的につくった。

４．研究成果

(1)今後の印欧語比較言語学の発展の鍵を担うアナトリア諸語を研究の中心にすえて、動詞形態論に関する実証的な分析を進めた。

ヒッタイト語の不規則な動詞austa「彼は見た」とmausta「彼は落ちた」について、この2つの動詞がどのような先史を経て、成立したのかという問題を解明した。まず、austaとmaustaにみられる末尾の-aを補助母音と考える、Eichner、Oettinger、Melchertに代表される一般の見方が誤りであることを示した。彼らが指摘している現象面での根拠についてはまったく

別の解釈を施すことができる。末尾の-aは楔形文字書記法の制約上、みかけのうえで書かれているにすぎず、実際には発音されていなかったと考えられる。

つぎに、austaとmaustaが-sという語尾ではなく、-staという語尾によって特徴付けられている理由について考察を行なった。hi-動詞の３人称過去能動態単数形は、ヒッタイト語内部の歴史において、-s --> -staという形態変化を受ける場合がある。しかしながら、なぜ古期ヒッタイト語の段階でaustaとmaustaが、すでに-staという語尾をとるのかが問題となる。その理由は、この２つの動詞が能動態と中･受動態の両方のパラダイムにおいて活用し、それぞれのパラダイムのなかで複雑な異形態を示している点に求められる。３人称過去能動態単数形であることを明示するために、hi-動詞語尾-sにmi-動詞語尾-taが付加されたと考えられる。

(2)接尾辞-ai-/-a-を持つ動詞クラスに見られる不規則な特徴を歴史比較言語学の立場から解明した。

ヒッタイト語動詞のうち、接尾辞-ye-/-ya-（< *-ye-/-yo-）を持つクラスの中･受動態動詞３人称単数は-yatta-（< *-yo-to-）という語末形式によって特徴付けられる（e.g. weriyatta(ri)「（彼は）呼ぶ」）。これに対して、接尾辞-ai-/-a-（< *-eh$_2$-ye-/-eh$_2$-yo-）を持つクラスは、接尾辞-ye-/-ya-を持つクラスと同様に末尾要素が*-ye-/-yo-に遡るため、-atta-（< *-aya-ta- < *-eh$_2$-yo-to-）という語末形式が予想される。しかしながら実際の文献資料においては、規則的に予測される-atta-（e.g. handattari「(彼は)整える」）ではなく、不規則な-aitta-（e.g. handaitta）を持つ例が圧倒的に多い。

接尾辞-ai-/-a-を持つクラスは作為動詞であり、このクラスに属する大半の動詞は能動態のパラダイムだけを持ち、中･受動態のパラダイムを欠いている。その能動態のパラダイムは１人称単数-ami、２人称単数-asi、３人称単数-aizzi（< *-eh$_2$-ye-ti）である。したがって、handaittaに代表される中･受動態動詞の不規則性は、対応する能動態３人称単数の-ai-という接尾辞からの二次的な形態的影響によって説明することができる。

(3)アナトリア祖語において接尾辞*-ye/o-を持つ中･受動態動詞クラスでは語幹形成母音*-o-を持つ*-yo-が一貫してみられるのに対して、接尾辞*-ske/o-を持つ中･受動態動詞クラスでは語幹形成母音*-e-を持つ*-ske-が一般化されているという事実を明らかにしたうえで、この事実に対して語幹形成母音の立場から説明を施した。

ヒッタイト語内部の歴史において観察される、-aから-attaという３人称単数中･受動態語尾の変化は、語幹が一定化されることと語尾がゼロと再解釈されることによって、引き起こされる。うえの２つの動詞クラスについては、この形態変化が先史の時期に生じたと考えられる。なぜなら、接尾辞*-ye/o-および接尾辞*-ske/o-を持つ中･受動態動詞クラスでは、先史の段階で語幹が一定になったからである。

接尾辞*-ske/o-を持つ中･受動態動詞クラスで*-ske-が一般化されたことについては、*-ske-が起源的にはs-現在のマーカーである*-s-と小辞*ke「今、ここ」の結合に由来し、小辞*ke（*koではない）との語源的な結びつきによって*-e-が広がったと考えられる。

アナトリア諸語以外の他の印欧諸語において、中･受動態動詞の語幹形成母音が*-e-と*-o-の間で交替するのは、対応する能動態の語幹形成母音から二次的影響を受けた結果と考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① Kazuhiko Yoshida, “Hittite Verbs in *-atta*.” *Sahasram Ati Sraja. Indo-Iranian and Indo-European Studies in Honor of Stephanie W. Jamison*, ed. by Dieter Gunkel, Joshua T. Katz, Brent Vine, and Michael Weiss. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2016. 499-511. 査読有

② Kazuhiko Yoshida, “Hittite *parḫattari* Reconsidered.” *Tavet Tat Satyam. Studies in Honor of Jared S. Klein on the Occasion of His Seventieth Birthday*, ed. by Andrew Miles Byrd, Jessica DeLisi, and Mark Wenthe. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2016. 360-367. 査読有

③ Kazuhiko Yoshida, “Hittite Verbs in *-nuzi*.” *Miscellanea Indogermanica. Festschrift für José Luis García Ramón zum 65. Geburtstag*, ed. by Ivo Hajnal, Daniel Kölligan and Katharina Zipser. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck. 2017. 881-900. 査読有

④ Kazuhiko Yoshida, “On the Prehistory of Hittite Mediopassives in *-i̯atta* and *-šketta*.” *100 Jahre Entzifferung des Hethitischen: Morphosyntaktische Kategorien in Sprachgeschichte und Forschung. Akten der Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 21. bis 23. September 2015 in Marburg*, ed. by Elisabeth Rieken. Wiesbaden: Reichert Verlag. 2018. 389-402. 査読有

⑤ Kazuhiko Yoshida, “On the Prehistory of Hittite *aušta* and *maušta*.” *Vina Diem Celebrent: Studies in Linguistics and Philology in Honor of Brent Vine*, ed. by Dieter Gunkel, Stephanie Jamison, Angelo Mercado, and Kazuhiko Yoshida. Beech Stave Press: Ann Arbor. 2018. 471-481. 査読有

〔学会発表〕（計２４件）

① Kazuhiko Yoshida, “Hittite *parḫattari* Reconsidered.” The 34th East Coast Indo-European Conference. 2015 年 6 月 6 日. ウィーン大学. （オーストリア・ウィーン市）

② Kazuhiko Yoshida, “On the Prehistory of Hittite Mediopassives in *-yatta* and *-šketta*.” 100 Jahre Entzifferung des Hethitischen Morphosyntaktische Kategorien in Sprachgeschichte und Forschung. Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft. 2015 年 9 月 22 日. マールブルク大学（ドイツ・マールブルク市）.

③ 吉田和彦「「ソシュールと比較言語学」日本言語学会第 151 回大会. 2015 年 11 月 29 日. 名古屋大学. (愛知県･名古屋市)

④ 吉田和彦「つぎつぎに明かされるヒッタイト語動詞の謎 —— 解読 100 年をむかえて」第 22 回西アジア言語研究会. 2015 年 12 月 5 日. 京都産業大学. （京都府･京都市）

⑤ Kazuhiko Yoshida, “Hittite Mediopassives in *-yatta* and *-šketta*.” Indo-European Roundtable. 2016 年 2 月 29 日. 京都大学. （京都府･京都市）

⑥ 吉田和彦「「死語から言語変化を推定する」京都大学言語学懇話会第 100 回例会. 2016 年 4 月 9 日. 京都大学. （京都府・京都市）

⑦ Kazuhiko Yoshida, “Hittite *aušta* and *maušta*.” Indo-European Workshop. 2016 年 5 月 2 日. ハーバード大学. （米国・ケンブリッジ市）

⑧ Kazuhiko Yoshida, “The Thematic Vowel **e/o* in Hittite Mediopassives.” The 35th East Coast Indo-European Conference. 2016 年 6 月 6 日. ジョージア大学. （米国・アテネ市）

⑨ Kazuhiko Yoshida, “Some Remarks on *aušta* and *maušta*.” Kyoto Workshop on Indo-European

Linguistics. 2016 年 7 月 3 日. 京都大学. (京都府･京都市)

⑩ Kazuhiko Yoshida, “The Thematic Conjugation Revisited.” Indo-European Roundtable. 2016 年 8 月 10 日. 京都大学. (京都府･京都市)

⑪ 吉田和彦「ヒッタイト語ḫi-動詞の３人称単数過去語尾」第 23 回西アジア言語研究会. 2016 年 12 月 24 日. 京都産業大学. (京都府･京都市)

⑫ Kazuhiko Yoshida, “Topics in the Hittite Verb (1).” Block seminar. 2017 年 4 月 24 日. カリフォルニア大学ロサンジェルス校. (米国･ロサンジェルス市)

⑬ Kazuhiko Yoshida, “Topics in the Hittite Verb (2).” Block seminar. 2017 年 4 月 25 日. カリフォルニア大学ロサンジェルス校. (米国･ロサンジェルス市)

⑭ Kazuhiko Yoshida, “Topics in the Hittite Verb (3).” Block seminar. 2017 年 4 月 26 日. カリフォルニア大学ロサンジェルス校. (米国･ロサンジェルス市)

⑮ Kazuhiko Yoshida, “Topics in the Hittite Verb (4).” Block seminar. 2017 年 4 月 27 日. カリフォルニア大学ロサンジェルス校. (米国･ロサンジェルス市)

⑯ Kazuhiko Yoshida, “Topics in the Hittite Verb (5).” Block seminar. 2017 年 4 月 28 日. カリフォルニア大学ロサンジェルス校. (米国･ロサンジェルス市)

⑰ Kazuhiko Yoshida, “On the Prehistory of Hittite *aušta* and *maušta*.” The 36th East Coast Indo-European Conference. 2017 年 6 月 2 日. コーネル大学. (米国・イサカ市)

⑱ Kazuhiko Yoshida, “On the Hittite Mediopassive Type *ḫandāitta*.” The 10th International Congress of Hittitology. 2017 年 8 月 29 日. シカゴ大学. (米国・シカゴ市)

⑲ 吉田和彦「ヒッタイト語作為動詞についての覚書」第 24 回西アジア言語研究会. 2017 年 9 月 10 日. 京都産業大学. (京都府･京都市)

⑳ 吉田和彦「ソシュールと比較言語学」京都大学言語学懇話会第 106 回例会. 2018 年 4 月 7 日. 京都大学. (京都府･京都市)

21 Kazuhiko Yoshida, “Two Indo-European Morphological Mirages.” The 1151st Meeting of the Linguistic Circle of the Faculty of Arts in Ljubljana. 2018 年 5 月 7 日. リュブリャーナ大学（スロベニア). (スロベニア・リュブリャーナ市)

22 Kazuhiko Yoshida, ““Some Old Morphological Features of Hittite Imperatives.” The 37th East Coast Indo-European Conference. 2018 年 6 月 16 日. ミシガン大学. (米国・アナーバー市)

23 吉田和彦「書記も筆の誤り：ヒッタイト楔形文字粘土板の世界から」西南アジア研究会総会. 2018 年 12 月 22 日. 京都大学. (京都府･京都市)

24 Kazuhiko Yoshida, ““The Hittite 3 pl. Preterites in *-ar* Revisited.” Indo-European Roundtable. 2019 年 3 月 28 日. 京都大学. (京都府･京都市)

〔図書〕(計２件)

① 吉田和彦 『新村出記念財団設立三十五周年記念論文集』(小林芳規、藤本幸夫と共編). 臨川書店. 2016.

② Kazuhiko Yoshida, *Vina Diem Celebrent: Studies in Linguistics and Philology in Honor of Brent Vine* (with Dieter Gunkel, Stephanie Jamison and Angelo Mercado). Ann Arbor: Beech Stave Press. 2018.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：森若葉
ローマ字氏名：MORI, Wakaha
所属研究機関名：国士舘大学
部局名：イラク古代文化研究所
職名：研究員
研究者番号（8桁）：８０４１９４５７

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。